

現地スタッフが「申し訳ない」

2008年8月、アフガニスタン東部のジャララバード近郊で、日本のNGOスタッフの誘拐事件が発生しました。誘拐されたのは、NGOペシャワール会の伊藤和也さん。伊藤さんはその後、遺体で発見されました。

悲報がアフガニスタン国内でも伝わると、PWJ現地事業責任者・児島淳の部屋に、何人もの現地スタッフが、「話がある」とやってきました。

「このような事件が起き、アフガニスタン人として申し訳ない気持ちでいっぱいだ」

児島は胸にこみ上げるものを感じながら、「そのように思つてくれて、日本人としてありがたく思う」と伝えました。

PWJが活動を続ける北部の治安状況に大きな変化はなく、PWJはアフガニスタン国内でのスタッフの駐在を継続することを確認しましたが、児島の一時帰国の日程を予定より早め、東京で関係スタッフによる状況分析や関係機関との調整を進めました。

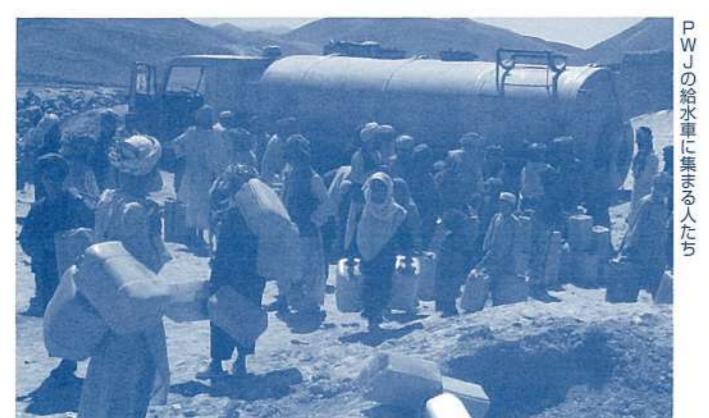
大干ばつに対応して緊急給水

今年、アフガニスタン北部の天水域（河川が存在しない地域）は、タリバン政権時代以来の厳しい干ばつに見舞われています。PWJの続けてきた水資源調査によれば、雨期に300～350mm程度の降水量があればある程度の生活を営むことができますが、今年は約100mmしか降らなかったのです。さらにアフガニスタン政府や米国国際開発庁（USAID）の調査によると、今年、この地域では麦が一粒も収穫できませんでした。

雨期に貯めていた水は、4月中に底をつけ、片道数時間かかる川の水も減少、水くみ場（湧水地点）も枯渇するところが目立っていました。

PWJでは、地元州政府や村人たちと調整を重ね、8月21日から緊急給水事業を開始しました。対象は、71カ村、約1万世帯（約7万人）。約20台の給水車が、乾期の終わる11月末まで毎日、天水域と水のある川の間を往復し、村々に最低限の水を配ります。

しかし、雨期が訪れても、今年収穫がなかった主食の小麦や来年のための種もみの確保、生活のために売却してしまった家畜の買い戻しなど、人びとの課題は尽きません。



「アフガニスタンの女性は質素な生活を強いられている」というイメージも強いかと思います。ところがそれは外部の目、男性の目があるところの話。実はとてもおしゃれで派手好きです。PWJ山元めぐみが現地駐在時、結婚式に招待されたときのこと。女性だけの部屋は赤や黄色やピンク、紫の衣装を着飾った親戚や知人たちでびっしり。ラメ入りの服を着た女性も少なくなかったとか。山元いわく、「女性はやっぱりおしゃれがしたいんだ」。

独自の水資源調査がいち早い対策に

PWJは2003年からアフガニスタン北部で水資源調査を続けています。降水量や積雪量、川の流量や地下水の量、気温、湿度などを観測して、この地域の水の循環を解明し、データを水資源の管理・活用に役立てるためです。

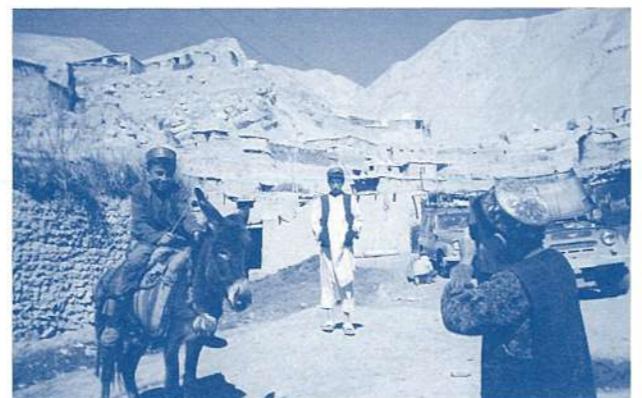


雨期の降水量が多ければ換金作物などの作付けを増やし、少ない年には自給自足のための小麦を育てるなどの対策が可能になるほか、正確なデータは地域ごとの水の配分を決定するためにも重要です。

精度を高めるためには長期的な観測が必要ですが、現在のデータでも、干ばつの危険がある年には早期に警告を発し、関係機関との調整を始めることは可能です。2008年の場合、PWJはラマダン（断食月）開始前の8月から緊急給水を開始しましたが、その時点で多くの国際機関や援助団体はまだ調査の段階でした。

「写ルンです」で素顔のアフガニスタンを

PWJアフガニスタン現地事業責任者 児島淳



先入観というフィルターができるだけ通さずに、実際のアフガニスタンを日本の人々に感じてもらうにはどうしたらいいだろうか。私がアフガニスタンで日々見ている光景を「写ルンです」で撮影しようと考えたのは、日本で一般的に捉えられているアフガニスタンのイメージと、私が現地で感じている感覚との違いを埋めてみたいと考えたからでした。もっといえば、私の目を通して一種のフィルターになってしまふと思ったのです。そこで、カメラを直接現地の子どもたちに渡し、彼らの目で現地の様子を撮ってもらおうと思ったのです。

日本の家庭にならどこにでもある家族のアルバム、そこにはきっと、長い時間をかけて積み重なった喜怒哀楽が記憶されているはずです。アフガニスタンの子どもたちが撮影した写真によって、彼らの家族写真の1ページを垣間見ることができたような気がします。

知っていますか？

「アフガニスタンの女性は質素な生活を強いられている」というイメージも強いかと思います。ところがそれは外部の目、男性の目があるところの話。実はとてもおしゃれで派手好きです。PWJ山元めぐみが現地駐在時、結婚式に招待されたときのこと。女性だけの部屋は赤や黄色やピンク、紫の衣装を着飾った親戚や知人たちでびっしり。ラメ入りの服を着た女性も少なくなかったとか。山元いわく、「女性はやっぱりおしゃれがしたいんだ」。

PWJはアフガニスタン支援を続けます

アフガニスタンでの支援活動中、事件に巻き込まれ、志半ばにして命を落とされたNGOペシャワール会の伊藤和也さんに心からの哀悼を捧げます。

PWJは2001年にアフガニスタン北部での活動を開始し、現在は日本人駐在スタッフ1人、アフガニスタン人14人の体制で支援を続けています。PWJの活動地域の治安状況には大きな変化がみられないこともあり、今後も日本人が駐在する形で支援を続けていきたいと考えています。

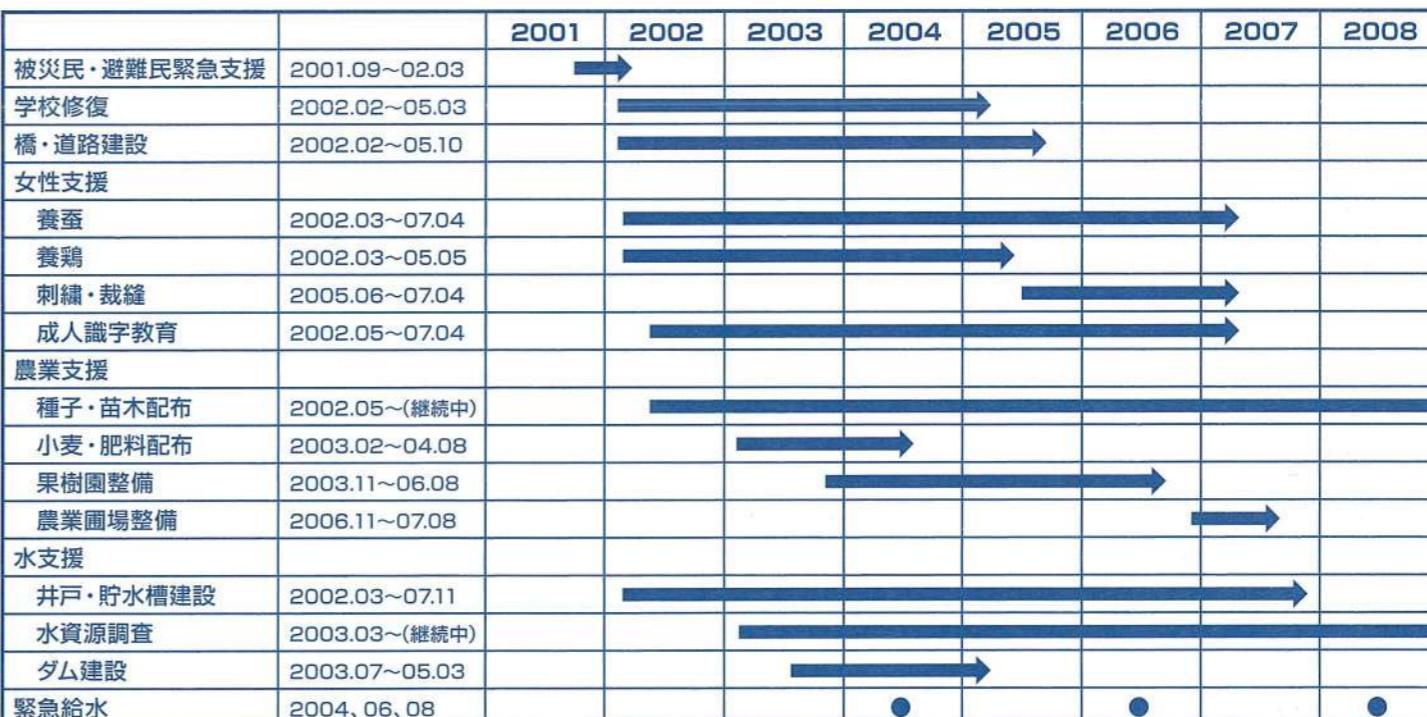
PWJは、そのモットーに「必要な人びとに必要な支援を」

を掲げています。リスクを極限まで下げる努力を積み重ね、現地スタッフを含めた要員の安全確保を最優先にしながら、必要な人びとに必要な支援を届ける努力を続けていくことがPWJの重要な役割です。

アフガニスタンの復興が進み、住民の生活が安定することが、ひいては暴力によって事態を解決しようという考え方があがることを防ぐとも考えています。

こうした思いのもと、PWJはアフガニスタンでの活動を続けていきます。

アフガニスタンでのPWJの取り組み



緊急集会でPWJ山元が発言

「アフガン日本人殺害」緊急集会（DAYS JAPANなど主催）が9月4日、東京都内で開かれ、PWJからは7月まで現地に駐在していた山元めぐみが参加し、現状などを話しました。

メディアなどで治安悪化が強調されていることに関連して山元は「必ずしも日本人が狙われているわけではない」「地域によって治安の状況は大きく違う」などと報告しました。

アフガニスタン情勢に関連して、多くのメディアでPWJの活動やスタッフの発言などが伝えられました。報道・出演のあった主なメディアは次の通りです。

朝日新聞（8月27日）、毎日新聞（8月28日）、東京新聞（同）、産経新聞（同）、共同通信（9月1日）、フジテレビ「とくダネ！」（8月28日）、同「めざましテレビ」（9月5日、山元めぐみ）、TBSニュースパーク「ニュースの視点」（9月3日、児島淳）、NHKBS1「きょうの世界」（9月12日、山元めぐみ）、TOKYO FM「クロノス」（8月28日、明城徹也）、「DAYS JAPAN」（10月号）

Water Planet 2008報告

「チェンジ・ウォーター！～水をえらぶくらし～」をメインテーマに、水について考えるきっかけづくりを提案するイベント「Water Planet 2008」が8月1日から9月15日まで東京の渋谷・青山・原宿エリアなどで行われました。「Think the Earthプロジェクト」主催のこのイベントに、PWJも特別協力としてかかわりました。

東京・青山では「アフガニスタンの子どもたち」写真展が行われ、アフガニスタンの子どもたちが撮影した写真約40点を展示しました。9月6日には会場内で、「ピースウインズ・ジャパンが見たアフガニスタン」スライドトークイベントが行われ、PWJ山元めぐみが現地に駐在しながら感じたことなどを話しました。

イベントの一環として9月15日には、朝日新聞社主催のシンポジウム「Sustainable Japan 2008」が開かれ、PWJ代表理事の大西健丞がPWJが各地で続けている水に関する支援や水を取り巻く状況について説明しました。

アフガニスタンの実際の様子を話すPWJ山元

